

(雜 錄) ○帝雉の分布及び蕃殖に就て

二六

酸性反應を與へ、而して直ちに醋酸を思ひ付かせる様な、刺戟性の固有の臭氣を持つてゐる。蟻酸であるといへば足りるだろう。此事は POUTTON (1906) が前記の *vinula* で明らかにしている。皮膚に及ぼす液の作用は之れを腐蝕し且痛痒を感ぜしめる、恰もイラクサの作用に似ているが多量でなければ著しくない。

著者は若齡の幼蟲時代から作用ある腺も有するかといふ事や、腺の形態及分泌液の化學的性質の詳細な研究、及同科他屬の者につきての觀察實驗等を近き將來に委してゐる。

(W. HERRICK and D. DERWILDER: "Notes on the Repugnatorial Glands of certain Notodontid Caterpillars." *Ann. Entom. Soc. America* Vol. XII, No. 1, p. 43, March, 1919)

(木下周太)

雜 錄

● 帝雉の分布及び蕃殖に就て

臺灣島固有の鳥類中最も有名なる帝雉の同島内に於ける分布地は從來阿里山六千呎以上、新高山麓、南投廳管内ラクラク山、同霧社支廳管内サラマオ社(七八千呎)及び同埔里社能高山の五ヶ所知られしのみなりしが今回菊池米太郎氏上京の節尙ほ他の新産地を報せられたり。因て茲に紹介せんとす。

花蓮港廳内タロコ蕃(六千呎)にて最近に採集せられしと云ふ。又同氏は殆ど誤りなき本種の足跡を宜蘭、パリ社支廳管内大平山の内、加羅山(八千呎)にて見たりと云へり。

産卵期は同氏によれば春秋二回なりとの話なり。昨年九月採集の時は雄鳥のみにして雌鳥は一羽も捕獲せられざりしは其當時秋の抱卵・入巢中の爲めなりと考ふと云へり。且つ先年十一月雛鳥を採集せしことあり。春季産卵は今回採集(四月十八日と二十日)したるに翌日一卵を産したるものあり且つ雌雄共其蕃殖期なることを確め得たりと。

菊池氏の云ふ如く春秋二回蕃殖するや否やは大に疑ひあるも稍若き成鳥二年鳥は春季に産卵せずして秋季に至り始めて蕃殖するものならんか或は又二番仔、三番仔等の如きものが遅きには非らざるか或は又巢卵を他動物に數度害せられしものが更に秋に至りても産卵育雛せしには非らざるか此點に關しては尙ほ充分なる調査を要すべきこととす。前記の一卵は從來臺灣にて獲られたることなきものにして臺北博物館に藏せられ菊池氏によれば白色なりと云ふ。最近 Bull. B. O. C., Vol. XXXIX, April 30th, 1919, p. 78 に H. Munn 氏は鳥檻内に産したる帝雉の二卵を供覧せりとあり。歐洲にても如斯本種の卵は珍らしきものとせらるゝなり。今般菊池氏は數羽の活物を獲之れを臺灣總督より献上せしが故に來年は内地にて

も蕃殖するものあり得べく將來は臺灣のみならず内地にも此珍鳥が多く増殖せんことを希望するものなり。

(黒田長禮)

●兩頭蛇

大正三年五月初鮮江原道杆城郡金剛山麓にて鮮人の捕獲せしと云ふ兩頭蛇の標本を知人より送附せられたり、就いて檢するにセアカヘビ (波江氏命名) *Elaphe bimaculata* (Cantor) の極めて若きものにて明に小なる兩頭相並びて生じたる標本なり。學術上稀れなる種に非らざるも兎に角兩頭あるは珍らしき畸形と云ふべし。因て本誌の餘白に掲げ報告す。

(黒田長禮)

●再びカハセミ巢内の魚骨に就て

先にカハセミ巢内の魚骨は既に卵時代に發見さるゝ事實を報じて置いた、處が不用意からあまりに簡單に過ぎたので本誌二月號に於て川口法學士は更に其魚骨の敷いてあつた巢は新築造のものか或は舊巢利用のものかと謂ふ質疑を呈せられた、依て更に詳細を報ずる事とした即ち以下に記すものは本誌昨十二月號(三百六十二號)に掲げたものと無交渉のものではない、前後の状況を明かにして置く必要があるので巢穴の築造時代よりの觀察を掲ぐる事とした(當事筆者は旅行中で觀察地に居らなかつたので野村宗重君の詳細なる觀察を其儘借用する事とした)

「大正七年五月十八日埼玉縣入間郡高麗村新堀の山間の水田に面した土壁の中途に二羽のカハセミが巢穴掘穿中なるを發見し漸時遠距離觀望の結果其二羽は疑なく雄雌であつて交々にて作業に従事し居る事をも確めた」

(雜 錄) ○兩頭蛇 ○再びカハセミ巢内の魚骨に就て

(野村君に據る)。土壁はあまり高くはないが上方は稍突出して居つて其直ぐ下に巢孔を見受く、巢孔より下方除土の推積して居る所迄の距離約二尺五寸乃至三尺は急傾斜である、從來此附近でカハセミの營巢した事實も聞き尙故巢も見受くる處であるが今回のものは全く新築造なる事は故巢の右側數尺の今迄見ない個所に開口して居る一事實を以て確證する事が出来る、六日を経た二十四日該巢を上部より注意しつつ掘り起した處最奥部の廣所の上部を掘り起すに及むで初めて卵上に座して居つた雌鳥が上部から掘り續いた穴より飛び去つた、内部には一握り程の綿狀となつた魚骨を敷き其中央は稍窪み氣味となつて居つて上に淡紅色の圓形に近き形狀の卵を四個發見した——野村君に據る——卵の採集に依つて此儘廢巢となつたが後に巢穴の構造を調べて見たら巢孔より約一尺五寸程の個所迄は稍上方に向つて掘り進みそれより奥は反つて下方に向つて今迄より稍急傾斜に五寸餘巢窩の入口に達する。巢窩は横徑約五寸(高さに於ても坑道より餘程廣いものらしいが上方から發掘したので委しくは識るに由ない)巢孔より巢窩の奥壁迄の延の長さ約二尺五寸の程ある等を識り得た。

他の一例は前個所に向合つた山の峯を越した反對面の頂上近くの滿庵坑の下方に向ふ坑口上壁に築造した一巢で坑口の階段上に立ち手を延せば樂に届く程の個所加ふるに朝晝夕には若干の坑夫が出入する敷の一部に巢食ふ